

和辻哲郎における「空」と「他者」

—その倫理学の形成初期におけるノート・論文を 手がかりにして*—

邱奕菲

立正大学文学研究科
哲学専攻博士後期課程

要旨

和辻哲郎の倫理学では「人間」の個と全の二重構造が説かれていても、人間の個別性の実現が比較的顧慮されていないのではないかという見方が従来から多くあった。しかしこのような批判は、和辻倫理学における無差別を説く中観論と比較して、差別を説く唯識論がそれほど重視されてこなかったことに由来するのではないかと筆者は考える。本稿では、大乘仏教の唯識派の観点に基づいた、またドイツ哲学や西田哲学の影響を受けたと考えられる、和辻の創造的空論を考察する。そしてそれと和辻の言う、自己を否定することによって有を産み出す、自身がダイ

* 受取日: 2022.07.31, 承認日: 2022.10.19。

本稿は、実存思想協会第37回大会(2021年6月19日、日本)における口頭発表を加筆修正したものである。ご意見を賜った査読者、多くの方々に感謝する。

ナミックなもの（意志）として無である「他者」ないし「絶対他者」に対する解釈との関係を提起する。

キーワード：和辻哲郎，倫理學，空，他者，中觀論，唯識論

【目次】

- 一、はじめに
- 二、ノート『仏教倫理思想史』における空の両義性
- 三、1931年の論文における空と他者
- 四、阿頼耶識から間柄へ
- 五、1934年の論文における絶対他者
- 六、おわりに

一、はじめに

歴史的で社会的なる生の表現の分析を通して人間存在のあり方を解明しようとする、近現代日本の哲学者であった和辻哲郎（Watsuji Tetsuro, 1889-1960）の倫理学は、近年、その間文化性によって世界的に再評価されている。しかしその一方で、それにおける人間存在の根本理法としての「空」、すなわち夫婦から国家までといった共同体に沿って層位的に人倫的合一を実現していくという「空の自己還帰運動」からすれば、和辻倫理学では「人間」の個と全の二重構造が説かれていても、人間の個別性の実現が比較的顧慮されていないのではないかという見方も従来から多くあった。

しかしこのような批判は、後述するように、和辻の主著『倫理学』（1937-1949, 全三巻）の補説である『人格と人類性』（1938）に所収された論文「弁証法的神学と国家の倫理」（1934）における、自己を否定することによって有を産み出す、自身がダイナミックなもの（意志）として無である「他者」ないし「絶対他者」に対する解釈、またそれと大乘仏教の唯識派の観点に基づいた、そしてドイツ哲学や西田哲学の影響を受けたとも考えられる、和辻の創造的空論との関係がそれほど重視されてこなかったことに由来するのではないかと筆者は考える。

和辻の主著『倫理学』で説かれている、「個人は、己れの本源たる空（すなわち本来空）の否定として、個人となるのである。〔…〕しかもこのような個人は、いかなる仕方にもしろ、とにかく己れを空じて社会に服属しなくてはならぬ。〔…〕だから個人は何らかの結合を実現するということを媒介として『空』そのものの方向に帰る」という「人間存在の根本構造」¹と、「絶対的否定性の自己への還帰の運動」である「人間存在の根本理法（倫理学の根本原理）」²は、しばしば学者たちに人間の存在構造や理法としての、竜樹のような「空の弁証法」と呼

¹ 和辻哲郎，《和辻哲郎全集》巻10，頁124。傍点は原著。

² 前掲書，頁141。

ばれる。³

なるほどこうした「空の弁証法」は、和辻が竜樹の説くすべての分別をなくす無差別空を借りて、自分の『倫理学』で論じたい、人間存在（＝特殊的な有たる自己）がその無差別空（＝普遍的な無たる自己）の自己否定（＝空が空ずること）によって展開され、またそれをさらに否定することによって無差別空に還る、いわば「主体の多化・合一の運動」⁴に使ったものと考えられる。しかしその倫理学の形成初期において書いた論文「仏教哲学における『法』の概念と空の弁証法」（1931）で和辻は、インド仏教における「空とは静的なあるものではなくして空ずること自身である」⁵と主張した上で、こうした「否定の運動」として空には、「差別より無差別に迫り行く中観論の方向」と、「無差別より差別への唯識論の方向」という二つの真逆の方向があると説いている。したがって、空の自己否定による差別化というのは、むしろ唯識論の方向にある空と言うべきものであろう。

もちろん、1937年から1949年にかけての『倫理学』全三巻は和辻の主著であり、そしてより成熟した論著でもあった。しかし、1937年以前の和辻の倫理学の形成初期におけるノートや論文は、彼の倫理学の発展過程のドキュメントとして、考察する意義があると思われる。というのも、その1931年～1934年に出した論文を集録した論集『人格と人類性』の序で和辻自身も言っているように、「これらの論文がいずれも拙著『倫理学』に関係のあるものであり、ここに比較的詳細に論じたところをかの著はただ簡単に取り入れているという関係から、この集録が幾分『倫理学』に対する補説の役目をつとめ得る」⁶からである。

³ 中島志郎、〈評論：「空の弁証法」とは何であったか〉、《禪學研究》89、頁39-60を参照されたい。なお、和辻の1931年の論文〈仏教哲学における「法」の概念と空の弁証法〉（《和辻哲郎全集》巻9所収）でも竜樹における「空」を「弁証法」と呼んでいる。

⁴ 和辻哲郎、《和辻哲郎全集》巻10、頁283, 300。

⁵ 和辻哲郎、《和辻哲郎全集》巻9、頁475。

⁶ 前掲書、頁319。

なお、和辻の最晩年の講演「私の根本の考」（1951）でも再び唯識論の意味上の「空」そしてそれと自他問題との関連を提起している。この点からすれば、和辻倫理学において唯識論の重要性が一貫していると考えられる。そのため、和辻倫理学の形成初期におけるノートや論文を手がかりにしながら、中観論寄りだった従来の和辻の「空」に対する解釈そして彼が考えた自他問題を、その唯識論との関係を考慮に入れながら改めて捉え直すことが必要である。

二、ノート『仏教倫理思想史』における空の両義性

中村元氏の考察によれば、1931年の論文「仏教哲学における『法』の概念と空の弁証法」は、和辻哲郎が京都帝国大学で教鞭を執っていた時に書いた講義ノート『仏教倫理思想史』（1925-1927）の最終章「唯識哲学」をもとに書き直したものである。それだけでなく、和辻のよく知られたインド仏教哲学に関する著作『原始仏教の実践哲学』（1927）と遺稿『仏教哲学の最初の展開』（『和辻哲郎全集』第五巻に所収）も、このノートと重複するところが多く見られる。⁷したがって、それらの著作は、実は京大時代の和辻におけるインド仏教哲学に対する思索をもとにして体系的に展開した、内在的連関が深い諸著作であると考えられる。

そこでまずは、和辻の京大講義ノート『仏教倫理思想史』を考察することを通して、彼のインド仏教における空に対する基本的な立場を明らかにしたい。周知の通り、京大時代の和辻は、一九二〇年代に起こった原始仏教の縁起説についての解釈論争に巻き込まれ、仏教学者であった木村泰賢と対立する宇井伯寿の縁起説解釈を基本的に認めた上で、愛、取、有、生、老死といった原始仏教における十二因縁を論理的かつ相依的な関係と解する立場を取った。和辻にとってこの立場は、時間系列的や因果性的な関係といった従来の不可解な伝統的解釈より救い出す「深

⁷ 中村元、〈解説〉、《和辻哲郎全集》巻19、頁380-382、390-391。

き哲学的な立場」⁸である。

その中で注目したいのは、ノートの第一篇「初期仏教」、また同篇をもとにした単行本『原始仏教の実践哲学』で和辻は、原始仏教における十二因縁を相依的、すなわち「始源が無い、究極の根拠が無い」⁹という関係と捉えた上で、それにおいて残された「無根拠」問題が後の竜樹哲学における「諸法の実相としての絶対空」¹⁰によって解決されたと説いている一方、以下のように『雑阿含経』十二卷二八七経を引用することによって、その空をさらに唯識論における根本識としての空と考えなければならないことを強調している。

老死……生……有，取，愛，受，触，六入，名色……識を縁として名色がある。識を限りとして還り，彼を過ぐることができぬ。識を縁として名色，名色を縁として六入處—触—受—愛—取—有—生—老死。」明らかにここでは識の縁を求めず，識を究極としてそこから再び老死の方へ還るのである。しかし識を究極の条件とすれば，識のみを「条件づけられざるもの」として許さなければならぬ。それは唯識哲学のごとく法無自性空の思想を通過して空に代わる根本識（すなわち阿頼耶識）を考える立場にでも行かなければ可能でない。¹¹

この際に注意しなければならない点は、和辻にとって原始仏教から大

⁸ 和辻哲郎，《和辻哲郎全集》巻5，頁173。

⁹ 前掲書，頁232。

¹⁰ 前掲書，頁236。傍点は原著。《雑阿含経》巻12：「何法有故名色有？何法縁故名色有？即正思惟，如實無間等生，識有故名色有，識縁故有名色有。我作是思惟時，齊識而還不能過彼，謂縁識名色，縁名色六入處，縁六入處觸，縁觸受，縁受愛，縁愛取，縁取有，縁有生，縁生老、病、死、憂、悲、惱、苦。如是如是純大苦聚集。」（CBETA, T02, no. 99, p. 80b29-c6）をも参照されたい。

¹¹ 前掲書，頁227。傍点は原著。

乗仏教までの歴史過程は直線的な発展過程よりも、むしろ弁証法的な止揚、統一の過程である。¹² こうした観点によって、ノートの第一篇「初期仏教」や『原始仏教の實踐哲学』ではもっぱら原始・初期仏教について論じているにもかかわらず、その後の大乘仏教哲学をも視野に入れている。それゆえに、和辻の原始仏教における十二因縁に対する哲学的立場は、ノートの最終章となる「唯識哲学」において説かれている、「有の境」すなわち世俗諦を論じる阿毘達磨の法論と、無差別空あるいは無自性空の義すなわち第一義諦を論じる竜樹の空論との総合として「空よりいかにして諸法が展開しいづるか」¹³ という問題を展開する唯識哲学と呼応しているように思われる。

三、1931年の論文における空と他者

前述の京大講義ノート『仏教倫理思想史』の最終章「唯識哲学」をもとに書き直した、1931年の論文「仏教哲学における『法』の概念と空の弁証法」で和辻哲郎は、京大時代から展開した「空よりいかにして諸法が展開しいづるか」という問題を引き続き思索し、「空がいかにして差別を生ずるか」（九・474）を論じている。他方、1931年初出のこの論文は、一九三〇年代頃から形成されてきた和辻倫理学の一環として、1925～1927年の京大講義ノートよりさらに「他者においておのれを實現することが『空ずること』の本質であるとすれば、空は必然にまた『差別を生ずること』」¹⁴ という、人間存在における自己と他者の根

12 「〔…〕当為が自然的立場のうちにその立場自身の否定として現われてくるとすれば、般若は般若として現われる以前にすでに自然的立場の奥底になければならず、滅もまた無明滅する以前に無明の根底に存せねばならない」（五・256）。「仏教哲学の展開は、原始仏教における法の概念にもとづき、この法の究極の根柢を求める運動として行なわれたのである。」（和辻哲郎、《和辻哲郎全集》巻9、頁479）

13 和辻哲郎、《和辻哲郎全集》巻19、頁358。

14 和辻哲郎、《和辻哲郎全集》巻9、頁475。

源問題に迫る。

なお、同箇所では和辻は、再び否定の運動としての空には中觀的と唯識的という二つの方向があることを強調しながら、「我々は後者の方向が前者の立場において、すなわち法論と空論との総合として現われた」と説いている。では、こうした「空」において「他者」と「自己の実現」をどのように理解すればよいのだろうか。それについてこの論文でははっきりしていないが、次の通り同じ 1931 年に発表された論文「倫理学—人間の学としての倫理学の意義及び方法—」（1931 年岩波講座『哲学』第二巻に所収、以下「倫理学」）での和辻のコーヘン倫理学解釈を通して、和辻の空における自己と他者の根源の問題に対する考えが窺える。

非我は私の否定である。我に於て否定の迂路無の迂路によって求められるのは、**私の根源**に他ならぬ。従って非我は**私の根源の概念**として、〔…〕ただ自我がその根源を持ち得る場面としての「人間」の概念のみ関係し得るのである。ところで自我の根源を探って無の迂路をたどるとそこに他者（das Andere）の概念がある。非我は他者である。他者が自我を産出する。¹⁵

フィヒテの自我論を援用するコーヘンの倫理学を踏まえて和辻は、倫理学において自己と他者は主観と客観でなく、むしろ相互主観的「人間」（人と人との間）関係にあると説く。そして非我としての「他者」に関連するために、我々は自己否定の迂路すなわち無の迂路を通さなければならない。この否定の迂路である「無の迂路」は、否定の運動としての「空」と考えられるだろう。なお和辻は、コーヘンが言う「自と他とは相互に聯関し、その相互聯関に於て自己意識を形成する。自己意識は何よりも先ず**他者**の意識に制約せられている。この自と他との合

¹⁵ 和辻哲郎、〈倫理学—人間の学としての倫理学の意義及び方法〉、《初稿 倫理学》、頁 54。傍点は原著。

一が初めて自の意識を、純粹意志のそれとして生産するのである」¹⁶に賛同を示しながら、コーヘンのいわゆる「人間」が概念に留まってしまふ問題を指摘し、概念よりも具体的な人間存在が根源であると主張する。¹⁷

この具体的な存在の根源は、実は京大時代の和辻においてすでに考えられていた。講義ノート『仏教倫理思想史』での主役の一つである阿頼耶識は、前述したように、一切の法がどのように空から生み出されるかを説明するために、「空」に代わって原始仏教における十二因縁の奥底にある究極の条件となる根本識、すなわち種々の法の所依となる諸可能性 (Möglichkeit) として登場した。こうした自身が無でありながら一切の存在の法がそれにおいて有る阿頼耶識を、和辻は「空の場所」あるいは「空なる場所」¹⁸ と呼ぶ。またそのために、唯識論は「竜樹における『空』の弁証法よりもはるかに具体性を帯び来たった」¹⁹ と和辻は言う。

四、阿頼耶識から間柄へ

さて、和辻哲郎の唯識論解釈における空に代わる阿頼耶識が、彼の倫理学あるいは人間存在における自己と他者の根源問題においてどのように論理化されてきたのか。この問いを解明するために、「心識」について触れなければならない。京大講義ノート『仏教倫理思想史』の最終章「唯識哲学」で和辻は、「宇宙万有は**個人的**心識より発現する」²⁰ といった唯識論に対する従来の主観的観念論的捉え方を拒否し、「心識」というのは唯識哲学において無限定の根本識である「阿頼耶識」とされるため、主客を超えた高次の意義を持つと述べている。そこで和辻は、

¹⁶ 前掲書、頁 54。傍点は原著。

¹⁷ 前掲書、頁 57-58。

¹⁸ 和辻哲郎、《和辻哲郎全集》巻 19、頁 368-369。

¹⁹ 前掲書、頁 369。

²⁰ 前掲書、頁 361。傍点は原著。

世親による『唯識三十論』が説く「識の轉變によって一切の法が現ずる」を取り上げ、「その意味で一切の法は『識の所變相』である」²¹と解釈し、問題を「それに対して『能變』は何であるか」に絞る。

和辻にとって、諸法の根本所依となる阿頼耶識、その構造や論理を明らかにすることは、すなわち一切法の根源たる「能變」は何であるか、いわば「空がいかにして差別を生ずるか」という問題を解明することである。すでに触れたように、京大講義ノートにおいて空に代わる阿頼耶識が、無限定の根本識として形而上学的根拠でなく単なる存在の諸可能性にすぎないとされる。また同ノートで和辻は、一切諸法を生ずる種子を内蔵している、「蔵識」とも言う「阿頼耶識」が一般に能蔵（蔵する）、所蔵（蔵される）、執蔵（能蔵と所蔵とを総合する）という三つの義があると言われることを取り上げ、もともと普遍的で無限定的な根本識である阿頼耶識が自身において自身の能蔵と所蔵とを対自的（für sich）に関連する、すなわち阿頼耶識が自身の執蔵を通して自身に内蔵されている種子を実現させ「自相を顕示する」ことを説き、そしてこうした「特殊となるべき普遍」としての阿頼耶識を「空の場所」²²と呼んでいる。

ノートに引き続き一 1931 年の論文「仏教哲学における『法』の概念と空の弁証法」でも「かかる自体空なる識が轉變して分別と所分別とを起こす。この点より見ればそれは一切法の種子識である。ここに『種子』というごとき形象的な言葉で言い現わされた概念は、恐らく我々にとって『可能性』の概念に当たるものであろう」²³と述べている。しかし注目に値するのは、和辻の倫理学の補説となるこの論文では、さらに「執蔵の義の自覚は『蔵にあらざること』に転じなくてはならぬ〔…〕ここに無差別性は空ぜられて差別的統一そのもの、すなわち

21 前掲書、頁 368。傍点は原著。《唯識三十論頌》：「由假說我法，有種種相轉。彼依識所變，此能變唯三，謂異熟、思量及了別境識。」（CBETA, T31, no. 1586, p. 60a27-29）をも参照されたい。

22 前掲書、頁 368。傍点は原著。

23 和辻哲郎，《和辻哲郎全集》卷 9，頁 476。

『我』が現出する」²⁴と説いている。

この「我」が現出する「空の場所」としての阿頼耶識は、同じ 1931 年に発表された長編論文「倫理学」において説かれている「我々は汝或は他者を通じて我を見出す […] 汝或は他者が見出される」という「間柄」²⁵と通底していると考えられる。というのも、論文「倫理学」をもとに書き直した主著『倫理学』で和辻は、「他者との連関は、いずれも否定的関係であった。個人の独立性は全体者に背くところにある、全体者の全体性は個人の独立を否定するところにある。 […] 人間の間柄的存在とはかかる相互否定において個人と社会とを成り立たしむる存在なのである」²⁶と、「間柄」についてより明らかにしているからである。

五、1934 年の論文における絶対他者

前述したように、1937 年に出版した和辻哲郎の主著『倫理学』上巻での「人間存在」あるいは「人間の間柄的存在」とは、個人と全体者がその相互否定によって成立されるという、個と全の二重的かつ相互否定的構造を持つ「人—間」（人と人との間）存在である。また和辻によれば、個人としての我々と全体者との連関とはすなわち己れと他者との連関であり、こうした連関において我々が「他者を否定するとともに他者から否定せられることにおいて存在するというほかならない」²⁷。したがって、「人間存在」はまさに「かかる相互否定において個人と社会とを成り立たしむる存在」²⁸とも言うべきものである。この点からすれば、和辻の言う「他者」とは、己れと対立する他者ではなく、むしろ

²⁴ 前掲書，頁 478。

²⁵ 和辻哲郎，〈倫理学——人間の学としての倫理学の意義及び方法〉，《初稿 倫理学》，頁 119。傍点は原著。

²⁶ 和辻哲郎，《和辻哲郎全集》巻 10，頁 106-107。

²⁷ 前掲書，頁 107。

²⁸ 前掲書，頁 107。

個々の己れを包むものとしての全体者あるいは社会であるように思われる。

ここでは、和辻の「他者」の理解問題が出てくる。従来のドイツ観念論における「他者」の解釈問題についての代表の一つとして、大橋良介氏が指摘している通り、フィヒテの『知識学の概念について』という本が 1798 年に再版される際、第一版で「知識学によって、その有とその諸規定とにおいてわれわれから独立であると見なすべき**非我**、およびこれを考察する場合に従うべきであり従わねばならない諸法則が、必然的なものとして与えられている」と書いているところは、その中の「非我」という語が第二版で「自然」という語に訂正される。²⁹ そこから生じた様々な問題は、例えばフィヒテにおいて「非我」（＝他者）とはすなわち「自然」なのか、またもし自我が自然の一部であるとするなら、「非我」あるいは「他者」とは自我と対立するものなか、それとも自我を包むものなのかなどの疑問が挙げられる。

「非我」と自我は一体どのような関係で繋がっているか、この問題に対して和辻の立場は、西田哲学の影響を受けて、「他者」とは自我と対立するものではなく、むしろ全ての対立を超える絶対的なものとして、我々人間を包む「絶対他者」であると考えた。1931 年の論文「倫理学」で和辻は、マルクスの自然論がヘーゲル学派のような現実離れのした思弁と対抗するものと評価している。和辻によれば、マルクスにおける自然は、人間の活動や労働などの行動によって変化する自然と、自然科学的な「自然」という二つの概念に区別できる。後者は人間がその意識においてそれを他者として見出した自然であるため、ノエーマ的な自然である。他方で前者は、人間がそれに対する関係は社会形態によって制約せられていると共に、また逆にそれを制約しているため、人間の社会的存在の一契機としての活ける自然であり、そして「それは西田哲学の意味におけるノエーシス的な自然であって […] 人間と自然との同一

²⁹ 大橋良介，《絶対者のゆくえ》，頁 73-74。強調は大橋良介氏に従う。

性が云わるるのはこの意味の於てである」³⁰ と和辻は言っている。前述した通り、和辻の言う「社会」とは己れを包む全体者あるいは「他者」であると思われる。もしここで和辻のいわゆる、人間と相互制約する「活ける自然」を社会のことを指すものとするならば、和辻における「他者」には、少なくとも我々がそれを認識対象とする自然科学的な「自然」としての他者と、我々がそれに包まれるとともに我々の行為によって変化していく「活ける自然」としての他者という、二つの異なる意味がある。

なお、1934年の論文「弁証法的神学と国家の倫理」で和辻は再び、他者・社会・自然について提起している。

周知のごとくカントはその『道徳形而上学の基礎づけ』の中できわめて気を負った言葉を述べている。これまでのあらゆる倫理学が失敗したのは自律を理解し得なかったためである。〔…〕ところでこの主張において斥けられている他律は、自己に対する他者としての自然及び神の支配であった。〔…〕フィヒテにあっては自己の独立性が倫理学の動脈である。シェリングの同一性においても自己に対立する他者は消滅している。ヘーゲルの汎神論はその延長であった。ヘーゲルが青年時代にユダヤ精神の特性を考究して、それを絶対他者の信仰に認めたことは、右のごとき連関においてははなはだ興味あることである。人に対立する絶対他者を認めることは人の自己疎外にほかならない。ユダヤ民族は土地及び人民に対して常に他者であった。それに対してギリシア精神は自然との調和を特性とし、ギリシアの神は他者ではなくして民族自身である。³¹

一見、「他者」ないし「絶対他者」に対して和辻は批判的な立場をと

³⁰ 和辻哲郎、〈倫理学——人間の学としての倫理学の意義及び方法〉、《初稿 倫理学》、頁43。

³¹ 和辻哲郎、《和辻哲郎全集》巻9、頁444。傍点は原著。

るが、同論文で和辻はさらに神学者ブルンナーとゴーガルテンの説を援用し「人が己れ自身の内にでなくして、他人の内に、共同体の内に、生を求めることを欲する〔…〕そこで我れは他人との共同体においてのみ人たり得る。共同体を作ること、すなわち人となることは神の意志である」³² と、「絶対他者」をそうした共同体的精神に基づく真の社会主義の意味上の他者と捉え直し、そして統治の意味ではなくむしろ公的領域の最大限の意味で「国家」を理解し「国家倫理学は共同体を個人からではなくして人の真相から把握する。自由を独立有からではなく依他的対他的存在の自由〔…〕その根柢には相互依存相互対立の人間存在の構造、及びかかる人間共同体を作らしめる神の意志が存している。すなわちそれは、絶対他者の立場における人間の学としての倫理学である」³³ と説いている。

六、おわりに

本稿では、和辻哲郎が京大時代から「空がいかにして差別を生ずるか」をめぐって展開した思索を考察することから始め、その倫理学の形成初期にある和辻における私の根源となる「他者」ないし我々の己れを包む「絶対他者」に対する解釈を解明した。これまで述べてきた通り、京大講義ノート『仏教倫理思想史』において、存在の生起の所依である根本識となる阿頼耶識は空とされるが、こうした普遍的で無限定的な根本識は本当に形而上学的根柢の疑いを免れるのかまだ疑問の余地がある。後の論文「仏教哲学における『法』の概念と空の弁証法」で和辻はより厳しく「空」を動的な「空すること」すなわち「否定の運動」に限るが、その最晩年の講演〈私の根本の考〉（1951）で彼は「主体としての絶対者は、『空』とも云い現わされるが、それは対象的には実際空なのである。しかし主体的にはそうではないそこから総てが出てくる主体

³² 前掲書、頁 448。傍点は原著。

³³ 前掲書、頁 456。

的根底である。唯識ではその過程が説かれている」³⁴と述べているように、唯識論の意味上の空を「絶対者」とも呼んでいる。そのため、和辻における空の「絶対否定性」の位置付けについては、今後さらに検討する必要がある。

³⁴ 和辻哲郎、〈私の根本の考〉、《初稿 倫理学》、頁 26。

【参考書目】

一、仏教典籍

本稿における仏教經典の引用は、主として「中華電子佛典協會」（Chinese Buddhist Electronic Text Association, 略称：CBETA）が作成した仏典テキストデータベース（CBETA Online, 2022.Q3 バージョン）によって校訂したものである。

二、和漢書籍、研究論文等

大橋良介 1993 《絶対者のゆくえ》，東京：ミネルヴァ書房。

中島志郎 2011 〈評論：「空の弁証法」とは何であったか〉，《禪學研究》89, 頁 39-60。

和辻哲郎 2017 〈私の根本の考〉，《初稿 倫理学》，荻部直編，東京：筑摩書房。

和辻哲郎 2017 〈倫理学——人間の学としての倫理学の意義及び方法〉，《初稿 倫理学》，荻部直編，東京：筑摩書房。

和辻哲郎 1963 《和辻哲郎全集》巻19，東京：岩波書店。（1990年，第三刷）

和辻哲郎 1962 《和辻哲郎全集》巻10，東京：岩波書店。（1990年，第三刷）

和辻哲郎 1962 《和辻哲郎全集》巻9，東京：岩波書店。（1990年，第三刷）

和辻哲郎 1962 《和辻哲郎全集》巻5，東京：岩波書店。（1989年，第三刷）

和辻哲郎 1931 〈倫理学——人間の学としての倫理学の意義及び方法〉，《岩波講座 哲学》巻2，東京：岩波書店。

論和辻哲郎的「空」與「他者」

——以其倫理學形成初期的筆記、論文為線索

邱奕菲

立正大學文學研究科哲學專攻博士生

摘要

不少學者認為，和辻哲郎的倫理學裡所謂的「人間」，雖然具有個人與全體的二重構造，但整體來說還是較少顧及人間的個性實現而偏向全體性。然而，筆者認為這樣的批評，部分是起因於過往學界對和辻倫理學的研究，多集中於其蘊含的中觀學說無自性觀點，卻忽略了其蘊含的唯識學說性起觀點所導致。因此本論文將考察基於大乘佛教唯識學派觀點，並受到德國哲學、西田哲學等影響的和辻哲郎的創造性空論，進一步探討和辻詮釋下的，藉由否定自身而生成一切有，自身卻為動態之無的「他者」乃至「絕對他者」。

關鍵詞：和辻哲郎、倫理學、空、他者、中觀、唯識

On Tetsuro Watsuji's "Emptiness" and "Others": Based on His Early Ethical Writings

Chiu, Yi-Fei
Doctoral student
Department of Philosophy,
Rissho University

Abstract

A conventional view in Tetsuro Watsuji studies is that "emptiness," the supreme principle of Watsuji's ethics, was mainly influenced by Madhyamaka Buddhist thought. As a consequence, Watsuji's ethics are often considered as a form of communism due to his emptiness referring to negation of our individuality by merging with social groups. To dispel the confusions, it is best to clarify Watsuji's so-called emptiness. This paper will demonstrate that the two main meanings of Watsuji's emptiness came from the concepts of Madhyamaka and Yogācāra Buddhist thought based on his early ethical writings, and analyze the relation between Watsuji's "others" and emptiness in the sense of Yogācāra philosophy.

Keywords:

Tetsuro Watsuji, Ethics, Emptiness, Others, *Madhyamaka*, *Yogācāra*